



「自己有用感」を意識した家庭内での関わり

わくわく通信100号で自己有用感の大切さについて、掲載しました。それでは、家庭の中での自己有用感を育むためにどういうことを意識すればいいのでしょうか？

家庭の中で、「自分は役に立つ!」と感じられるようになるためには、役割を与え、その結果を評価することが大切です。役割は、毎日行えるもの、定期的に行えるものとなる、いわばルーティーンになるものが多いでしょう。晩ごはんのお皿を下げる、お風呂を洗う、ゴミを出すなどが一例です。やったかやっていないか、すぐに分かる方が、結果を評価しやすいのでおすすめです。

ちゃんとお皿を下げてくれたら「ありがとう!助かるよ!」と声をかける。ゴミを出すことを忘れてしまったら「ゴミ出ししてくれた?お願いね!」と声をかける。

やってくれたことに対しては、その行動をちゃんと認めて、お礼を伝えることが大事ですし、やらなかったことに対しては、否定するのではなく行動を促すことが大事です。

行動すれば認められる、行動しなければ背中を押されるという習慣が身に付くことで、自分の行動が家族の役に立っている、必要な役割を与えられていると自覚します。その自覚が、自己有用感の高まりへと繋がっていくのです。

また、役割は成長に合わせて、難易度を上げていくことも重要です。ゴミを出すだけでなく、ゴミを仕分けられるようになるなど、任される役割が変わることで、子供自身が自分の成長に気付くことにもつながります。

家庭内で、自己有用感を意識して、しっかりと役割を与えていきましょう。



災害対策基本法と災害伝承

災害対策基本法がつくられたきっかけは、1959年9月、日本に上陸した伊勢湾台風という災害です。この災害対策基本法は、災害の被害をなるべく小さくするために、国、都道府県、市区町村、そして私たち市民それぞれに防災に取り組むことを義務付けています。さらに2013年の改正において、「災害教訓の伝承」という内容が加わりました。具体的に言うと、「私たち市民は、過去に起きた災害で学んだ教訓を伝承する」という「災害を伝承する」ことが「責務」になったのです。「責務」とは、「しなければならないこと」です。この改正は、東日本大震災の教訓を語り継ぐために行われました。東日本大震災の特徴の一つは、過去何度も津波が襲った地域だったのにもかかわらず、その後に教訓が伝わらず、大きな被害が発生したことです。

今後、熊本市でも災害訓練等が予定されていますが、私たちが体験した熊本地震も風化させることなく、後世に「伝えていく」ことが必要になってきます。